

しかしながら育林が更に高度に発展した段階では、このような労働力では生産力の極權となる。そして生産関係をかえて行く労働力の新たな方式が展開されるのである。即ち木場作小作に依存する育林労働のみでは、集約化され拡大された現在の山林経営にとつては到底不可能な程不足するから相当量の賃銀労働者としての雇傭労働力が投入されるようにならざるをえないのである。

このことは地主の側からみれば、木場作小作に依存する従来の林業経営を支えて来た雇傭の必然的な減少

であり、一方木場作小作の代償として自己の労力を提供して来た農民達にとつては地主の土地からのしめ出しを意味するのである。

ここにおいて木場作小作を行つて来た農民達は次第に必然的な形で新たな賃銀労働者へ転落するの余儀なきに至る。

日本資本主義の発達、即ち林業の資本主義化によつて雇傭による林業経営は駆逐されざるをえなくなり、新たな賃労働者対資本家という生産関係に移行するのである。

58. 今後における造林の方向

佐賀県林務課 山 田 宏

この小論は、当面する日本の造林政策上の問題とか、最近生じて来た林産物の需要構造の変化等から出発して、少くとも今後における北九州地方の造林はこのような方向に向つて進むのが妥当であると思われる事柄について、平素筆者が断片的に考えている事柄をとりまとめたものであり、別に事新しい発案でもなく、どんな雑誌にも散見する事柄である。

1. 薪炭の需要の変化

最近薪炭の需要構造に顕著な変化が生じて来ている。それは薪炭の最大の消費地である都市における燃料の消費形態が大巾に変動したことに起因する。最近都市においては、薪炭に代つてガス、石油、電熱、プロパンガス等使用が非常に便利で、しかも安価な燃料が急速に出廻つて来た。そのため薪炭の需要量は、以前に比べてとみに減少し、この傾向は少くも今後とも続くものと考えられる。薪炭の価格は需要と供給との関係によつて決定されるが、今後薪炭の需要が低調の傾向にあるものとすれば、有利な価格も期待されない。そのような理由で、今後は薪炭材生産を目的とした林業経営乃至造林は余り有利とは言えないこととなる。

2. 構造材の需要の変化

最近構造材の需要構造にも顕著な変化が生じて来た。構造材とは柱材、橋梁材、坑木、枕木、電柱材等を指すが、戦後戦災地の復興、特需等により莫大な量の構造材の需要があつた。所が復興も略終了し、その上コンクリート等の代替品が急速に進歩した今日、構造材の需要も低調となり、この傾向は今後も続くもの

と考えられる。そのような理由から需要と供給の関係により、今後における構造材は、今までのように価格の伸びが期待されないこととなる。そこで戦後の造林の構造材生産一点張りにも一考を要する事態となつたのである。

3. 化学用材の需要の変化

化学用材の需要の発展は極めて好調である。紙の使用量は文化の発達に比例して増加するし、木材糖化学工業も今後はかり知れない発展の様相を示している。そこで今後化学用材生産を目的とした林業経営乃至造林が有利と思われるようになった。化学用材は、素材の形に対しては余り条件を附されないが、材積と重量の多いことが要望される。そこで化学用材生産を目的とする林業経営はスギ、ヒノキの如き形の整つたものよりも材積、重量の上るものならば例えばタンニンアカシヤ、ユーカリその他の広葉樹でもよいと言ふこととなつた。このような所にも今後における造林の一方方向を示しているように思われる。

4. 素材の径級の変化

最近利用される素材の径級にも大きな変化が生じてきた。従来ならば相当径級の大きな素材でないと利用されなかつたものが、最近ではかなり径の小さい素材までひろく利用されるようになった。それは大径木の減少、大径木の価格の高騰によるが、何と言つても木材加工技術の発達によることは否定出来ない。このようなところから

- (1) 密植造林の傾向となる。
- (2) 間伐が有利になつた。

(3) スギ、ヒノキを混植し、しばらく両者の成長を見守り、後どちらを間伐するといった造林法が今後考えられるようになった。

5. 跡地造林から林種転換へ

終戦以来今日までの国家の造林政策の方向は、伐採跡地等造林未済地の解消に向けられていたが、一応その問題も解決した今日、積極的生産力の増強をめざして林種転換の問題が大きく台頭して来た。さらばいずこなりとも林種転換の可能な個所はすべて人工造林を行うべきかと考えられ勝であるが、その点は次の如く考えられる。

(1) 天然林を林種転換してスギ、ヒノキの人工林化するには、その適地が相当限定されるものと思われ

る。そこで適地と考えられる所は積極的に人工林化すべきである。

(2) 人工林化する事が無理と考えられる場合は、むしろ天然林として生かす方がよい。九州地方はカン、シイ帯であるが、このことは自然の環境がカン、シイに適している訳である。又20年というような短伐期を考えるとスギ、ヒノキに比べてカン、シイの方がむしろ石数が上ると考えられる。又広葉樹材も化学用材としてその将来が極めて明るい。又人工林化するよりも労働も経費も極めて安価に終る訳である。

(3) 今後天然林の施業改善はもとより、積極的にカン、シイ、クスギ等の優良広葉樹の人工造林も考慮すべきであろう。

59. 竹の生長に対する強風害

宮崎大学 重松 義 則

強風が植物生長に与える障害は動揺・枝葉の摩擦・衝撃・折損（以上機械的障害）過度の蒸散・乾燥低温（以上、生理的障害）などがあげられる。例えば、Bernbeck は風速 0 : 5 : 10 m/sec の時の植物生長は 3 : 2 : 1 の比であると云っている。或る篤林家は伸長中の竹の子には絶対に手を触れることを禁じ、又甚しい例は、三重県新居村では竹の子に指をさすとくさるとさえ云い伝えられて、何れも動揺害を大いに恐れ戒

めており、竹林学の本には挙つて防風林の必要、増離（かき）の設置を強調しているのはこのためと思われる。古来京都の地は良竹を産し、阪神地方の酒樽のタガに向けている。これは地名の山城の国名の通り、四方に山を囲らし強風の襲来を防ぐからだと云っている。南九州は高温多雨で竹の栽培に向くようであるが、業者に云わしむると、節間の伸びが悪く、節が高く、質が硬過ぎると批難している。試みに京都・宮崎

第 1 図 竹の子の成長に対する人為的動揺障害の試験

